〔東京家政大学研究紀要　第27集，p. 119〜126，1987〕

幼児の運動指導 (1)

渡 辺 敏 子

（昭和61年9月30日受理）

The Movement Guidance of Infants (1)

Toshiko WATANABE

(Received September 30, 1986)

はじめに

近年，幼児をとりまく社会的環境の変化に伴なって，幼児期における運動的活動の重要性がとりあげられ，幼児の体力づくりも盛んに行なわれるようになってきた．水泳教室，体操教室など社会体育的なものだけでなく，幼稚園，保育園などにおいても様々な運動指導の試みがなされており，また体育専門講師を採用する園も多く見られる．このような状況は望ましいと思われる反面，対象が〝幼児〟であるが故に，その運動内容，指導方法には多くの問題が含まれている．幼児期の運動的活動の在り方を発達課題からとらえ，問題意識を提供してくれる例がある．近藤[1]は，「幼児の発達課題と運動」において，最近の子どもの課題と年齢の不一致が目につくと言い，次のように述べている．「最近は幼児の運動能力というよりも運動技能に着目した研究がみられるようになってきたが，ここでも走る，とぶ，ころがる，まりをつく，など単一の技能に関するものが多く，それらが比較的完成型に近くなるのは7歳以降である．動きのいくつかを組み合わせた技能を獲得することを幼児期の一般的な子どもに期待することはむずかしいと考えるべきではないだろうか．かつて幼児の運動発達を示すものとして運動技能の獲得水準がとりあげられていたが，それらの多くは日常の子どもの運動的遊びにみられる技能であった．

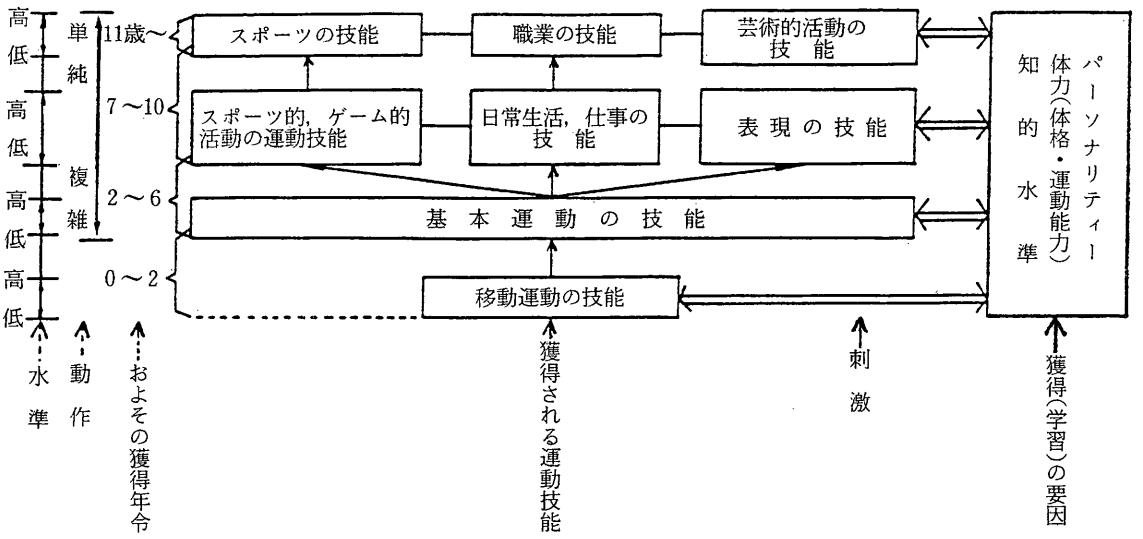


図1　運動技能の獲得過程の概略図（近藤）

児童学科

例えば，階段の一段目からとび下りるとか，ブランコをこぐとか，滑り台をすべる，あるいはジャングルジムの上まで登れるなどである．これらの動きも単一な動きである．このようなことからみるならば，幼児期には単一な身体の動きを多種類にわたって身につけることが発達課題なのではないかということである．そして技能は幼児の日常生活のいろいろな場面で活用されるものであり，将来はその動きが基本になってスポーツに結びついたり，職業に結びついたり，芸術的活動に結びついたりするものである．ということで幼児期の発達課題としての運動技能であるといえるのである．」このように近藤は幼児期の運動技能の獲得は発達段階を考慮することを指摘している．また，この運動技能の獲得過程について概略図を示し，「これまで述べてきた幼児期の運動技能を生涯の運動技能との関係で位置づけると（図Ⅰ）のようになるのであろう．この図は発達的に乳児期の動きや幼児期にみられる生活や遊びの技能，そして小学校の運動の学習内容やスポーツへ志向される年齢などをもとにした概念図である．意識的に意志的な運動がみられる乳児期からみていく1とで，それぞれの時期の子ども（あるいはおとな）の心身の発達を基礎にしており，運動技能だけが突然獲得されるものでないことをおさえておかなければならないことを示してみたのである．」と述べている．

時代は進み，教育レベルも向上し，幼児期の子どもに対するおとな側からの働きかけが以前に比べて増大している．特に運動的活動については，高度な技術学習がとり入れられ，個々の運動がうまくなる，できるようになることだけを中心に指導が展開されているところも多いようである．効率のよい指導は人気を集め，一部ではまるでどこまでできるかを競っているようにもみえるが，幼児教育に関係するものとして，特に子どもたちのあるべき姿を考えることのできる立場にあるものがこうした現状を考え直してみなければならないであろう．

Ⅱ　研究の目的

幼児教育の現場において運動的活動を積極的に進めていくためには，その指導者である保育者自身が幼児の心身の発達過程や運動技能の内容とレベルについての理解を深めるだけでなく，対象の発達状態に応じた適切な指導の工夫が要求されてくる．しかしながら実際の場面ではどうであろうか．その必要性について理解されているにもかかわらず，運動そのものの意味や働きに対する理解が浅く，何をねらって，どのような運動を，どう指導すればよいのかがわからず，適当な判断，適当な内容，適当な指導のレベルで活動が展開されているように思われる．以上のことから，今回は幼稚園における運動的活動の実態を調査し，その現状と問題点を明らかにする．

Ⅲ　研究の方法

保育内容「健康」の授業の一環としてとりあげた実習時の運動的活動の観察記録をもとに，内容を以下の項目にまとめ調査資料とした．

① 園にある運動遊具
② 自由遊び時での運動的活動
③ 運動的活動の一斉指導
④ 園としての運動的活動へのとり組み方
⑤ 園としての子どもの運動能力のとらえ方

以上が調査項目である．尚，観察記録提出者210名（公立幼稚園，29，私立幼稚園，57），実習期間は昭和58年11月14日〜12月3日である．

Ⅳ　結果および考察

1　遊具について

園で所有する遊具で主に運動的活動に使用されるものを，A・固定遊具（固定施設），B・大型遊具（移動できるが幼児一人では持ち運びのできないもの），C・小

表Ⅰ　遊具の所有状況

順位	A 固定遊具	所有率	B 大型遊具	所有率	C 小型遊具	所有率
1	鉄棒	95.3	マット	98.3	ボール	100
2	滑り台	90.7	跳箱	81.0	なわ	97.4
3	ジャングルジム	82.6	平均台	54.0	輪	56.3
4	ブランコ	76.7	巧技台	52.0	大型積木	51.9
5	雲梯	74.4	トランポリン	30.9	タイヤ	19.1
6	登り棒	51.2	・移動鉄棒	22.8	バット	18.3
7	太鼓橋	43.5	・サッカーゴール	12.3	車(一輪・二輪)	15.7
8	つり輪	18.6	トンネル	10.4	ホッピング	10.4
9	グローブジャングル	17.4	室内滑り台	7.0	カンポックリ	9.6
10	鎖遊具	15.1	・バスケットゴール	3.5	竹馬	7.0
	他15種		他3種		他9種	

・印：私立幼稚園のみ

型遊具（手で持ち運びできる，または操作をするようなもの），に分類し，結果を表Ｉに示した．

Ａ：鉄棒は公立幼稚園（以下公立とする）（89.6%），私立幼稚園（以下私立とする）（95.3%）とも所有率の一番高い遊具である．公立では小学校との共用もあり，この調査では数に入っていない園もある．また私立では移動鉄棒（Ｂに分類）を所有する園が22.8%あることからこの遊具はほとんどの園にあると思われる．次いで，滑り台（公立82.8%，私立95.2%），ジャングルジム（公立89.6%，私立79.1%），ブランコ（公立48.3%，私立91%）の所有率が高いが，幼稚園設置基準の中にも示されている滑り台，ブランコは実習園の全てには見られない．公立については鉄棒同様の理由が考えられるが，私立では従来の型ではなし総合遊具の中に含まれていたり，非常用をかねて園舎に取り付けられていることもあり結果にでていないのであろう．ブランコについては，この遊具と同様の特性をもつ，タイヤ，吊玉などが他にもあげられており，教育的な，あるいは安全への配慮からか付け替えられている園もあると思われる．またこの時期に関しては取りはずしている園が多い．ジャングルジムは従来の型は公立に多く，私立ではカラージャングルキャッスルジム，ヒコウキジムなども多く見られる．表Ｉにあげられた遊具の他に15種あげられている．公立で所有する遊具は上位５種に集中し，平均所有数は5.8台であったが，私立では上位５種を中心に平均所有数は9.1台と多く，一園で15種の固定遊具を所有しているところもある．

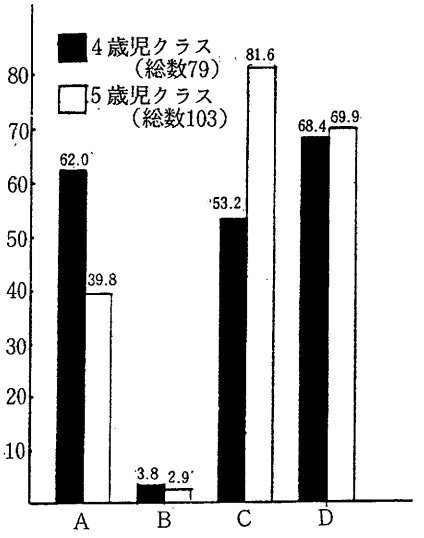
Ｂ：マット（公立100%，私立96.5%），跳箱（公立75.9%，私立86.2%），平均台（公立44.8%，私立62.7%）と所有率が高いが，公立においては平均台と巧技台（72.4%）が逆点している．移動鉄棒，サッカーゴール，バスケットゴールは私立のみ所有する遊具であった．表Ｉに示された以外には，的（公立のみ），はしご，踏切り板があげられているが平均所有数は公立，私立とも変らない（平均3.7種）．

Ｃ：ボール（公立・私立100%），なわ（公立100%，私立94.8%），輪（公立67%，私立46.6%）の順であったが，今回の調査ではその種類，数は明らかでない．表Ｉに示された遊具の他には，ゴム，フリスビー，バランスボール，スケートボード，ローラーボード，一輪車，二輪車があげられているが，手作りの遊具として砂袋，新聞ボールなどもある．

以上，所有する遊具の種類とその所有状況をみてきたが，〝おとなの工夫で子どもたちのためにつくられた〟これらの遊具を使って子どもたちはどのような活動を展開しているであろうか，次の自由遊び，一斉活動の中でみていく．

2　自由遊び

自由遊びの中での遊具の使用状況を図Ⅱに示した．



図Ⅱ　遊具の使用率

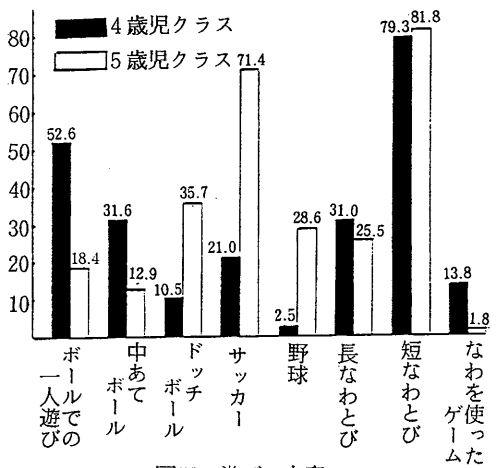
Ａの中で主として使用された遊具は，４歳児クラス（以下４Ｃとする）では砂場が最も多く（今回の運動遊具の分類からは除外），鉄棒（35.4%），ブランコ（34.7%），滑り台（20.4%），ジャングルジム・雲梯（8.2%）の順である．主な活動の内容は，砂場では山・川・トンネルづくり・ごっこ遊び，鉄棒ではぶら下がりっこ・前まわり下り・スカートまわり，滑り台やジャングルジムではその遊具だけでの遊びではなく，鬼遊びの中での使用が多く（高鬼，鉄鬼など），まだごっこ遊び（ダイナマン，ガンダムごっこなど）の基地として使われている．

５歳児クラス（以下５Ｃとする）での使用遊具は，砂場がやはり多く，鉄棒（41.5%），滑り台・雲梯（17%）の順である．そこでの内容は，砂場・滑り台・雲梯では４Ｃ同様の遊びがみられたが，鉄棒では逆上がりがほとんどであった．これらの遊具の所有率はいずれも高かったがこの時期にはあまり活用されていないようである．また，鉄棒・雲梯の使用は園により違いがみられる．固定遊具はそれぞれの特性から，いろいろの経験が可能で

あるが，その使用については子どもの好みが強くでてくる遊具であると思われる．遊具の特性を理解した上での保育者の適切な働きかけが時には必要となろう．

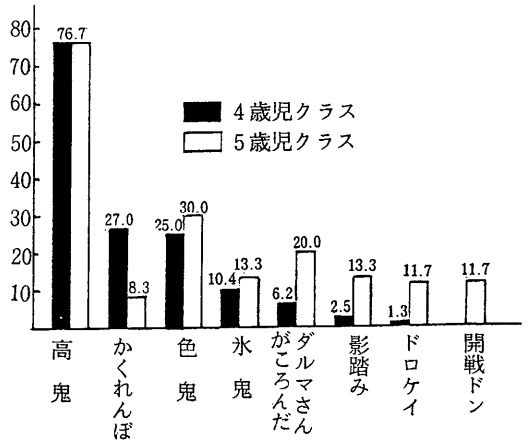
Bの中で主に使用された遊具はトランポリン（4C0.05%，5C0.02%），巧技台（4C0.03%，5C0.01%），跳箱（5C0.01%）であった．トランポリンはいろいろな跳び方を，巧技台では組み合わせの中でごっこ遊び，跳箱では腕立て開脚とび越しがみられる．Bはほとんどの園で室内にあること，また安全への配慮からか，使用に制限のある園が多く，一斉活動の時に限られている園がほとんどであった．

Cの中で主として使用された遊具はボール（4C36.7%，5C48.7%），なわ（4C24.5%，5C62%）である．それぞれの内容を図Ⅲに示した．この時期では他の遊具



図Ⅲ　遊びの内容

に比べ使用率が一番高い．Dは遊具を用いないでの遊びであるが4Cで10種類あげられている．その中では鬼遊びが一番多く（4C60.4%，5C58.3%），その遊び方も4C，5Cとも21種類あげられている．主な鬼遊びを図Ⅳに示した．この他に4Cでは引越し鬼，追いかけ鬼，ハンカチ落しなどが，また5Cでは引越鬼，手つなぎ鬼，ヘビ鬼などがあげられている．次に歌を伴なう伝承・リズム遊びがあげられているが（4C21.5%，5C11.7%），その内容は，花いちもんめ（4C76.4%，5C83.7%），ことしのぼたん（4C11.8%，5C30%），かごめかごめ（4C17.6%）など4C，5Cとも5種類あげられている．他では，4Cでドンジャンケン（10.1%），リレー・フォークダンス（8.9%），相撲（5.1%），5Cではリレー（15.9%），相撲（5.3%）などそれぞれ7種



図Ⅳ　鬼遊びの内容

類あげられている．以上が今回の調査でみられた自由遊びでの運動的活動の内容である．自由遊びにおいて運動的活動をより積極的に行なわせるための一つの方法としてであろうか，5Cに対し，「がんばり表」スポーツ表」「なわとび表」「忍者の修業」「挑戦カード」などをつくり卒園までの達成課題としている園がある．その内容は，鉄棒では「さか上がり」なわとびでは「回数・とび方」，跳箱では「腕立て開脚とび越し」などがあげられており，「できる」「できない」が評価の中心である．また園の行事として「ドッチボール大会」「マラソン大会」などを計画している園もある．このような園では自由遊びの時もそれに関係した活動が多い．5才児ともなるとある程度目的をもっての活動が可能であるが，運動的活動への積極的な参加をこのようなカード等から求めるのは果して幼児期に適した方法であろうか．また自由遊びの時間に，保育者ができない子どもをできるように指導することが本来の自由遊びでの指導であろうか．保育者として自由遊びとは何か，又自由遊びでの指導はどうあるべきか，考えてみなければならないであろう．

3　一斉活動

一斉活動としての運動の指導は，4C・39クラス（公立15，私立24），5C・51クラス（公立18，私立33）においてみられた．指導者は保育者と体育専門講師（以下講師とする）に分かれるが，公立では全て保育者の指導であったが，私立では14クラスが保育者の指導であり，他は全て講師の指導によるものであった．尚，今回の調査では，私立幼稚園の63.1%（35園）に講師が採用されていたが，これらの園での保育者による運動の一斉活動はみられない．活動内容の決め方を指導者別にみると，

表II　一斉活動時の使用遊具状況

	内容＼指導者	四歳児クラス 講師	四歳児クラス 担任	五歳児クラス 講師	五歳児クラス 担任
A 固定遊具	1.鉄棒	6	2	8	
	2.太鼓橋	1	1	1	
	3.ジャングルジム	1			
	4.雲梯			1	
	5.登り棒			1	1
	6.埋込タイヤ			1	
B 大型遊具	1.マット	5	2	5	
	2.平均台	1	2	3	
	3.跳箱（踏切板含）	8	3	10	2
	4.トランポリン		1	1	
	5.はしご		1		
	6.巧技台			1	
C 小型遊具	1.なわ	6	1	10	3
	2.ボール	7	4	9	6
	3.タイヤ	1		1	
	4.輪			1	
	5.タオル				1
D	(用具を用いない)	15	14	15	13
	総クラス数	19	20	24	27

表III　固定遊具を使った活動内容

遊具	内容＼指導者	四歳児クラス 講師	四歳児クラス 担任	五歳児クラス 講師	五歳児クラス 担任
A-1	ぶら下がり(両手)	2	1	2	
	ぶたの丸焼き	1			
	足抜きまわり	1	1		
	こうもり手つき下り	1			
	前まわり下り	5		2	
	腕立てとび上がり	2		1	
	逆上がり	1		7	
	自由		1		
A-2	わたる	2			
	ぶら下がり(片手)			1	
A-3	くぐる	1			
A-4	四つ足わたり			1	
	ぶら下がり(片手)			1	
A-5	よじ登り			1	1
A-6	腕立てとびこし			1	

表IV　大型遊具を使った活動内容

遊具	内容＼指導者	四歳児クラス 講師	四歳児クラス 担任	五歳児クラス 講師	五歳児クラス 担任
B-1	前転	5	2	5	
	前転競争	1			
	手なし前転			1	
	二人前転			1	
	後転	1	1		
	横ころがり	1			
	膝立ち歩き			1	
	交互とびこし			1	
	マットのり	1			
B-2	前歩き	1	2	2	
	後歩き			1	
	しゃがみ歩き	1			
	横とびこし	1		2	
	とび下り			1	
B-3	よじ登り下り	2	2		
	とび乗りとび下り	3	1	1	
	またぎこし	1	1	1	
	腕立てとび乗り	1		1	
	腕立て膝乗り			1	0
	開脚とび越し			9	2
	台上前転			3	
	台上片足立ち			1	
	両足踏切り			2	
B-4	とぶ			1	
B-5	くぐる				
B-6	つみ重ね競争			1	

表Ⅴ　小型遊具を使った活動内容

遊具	内容＼指導者	四歳児クラス 講師	四歳児クラス 担任	五歳児クラス 講師	五歳児クラス 担任
C-1	短なわとび・前	3		4	5
	・後	1		4	1
	・片足			1	
	・かけ足	1		3	4
	・あやかけ			2	
	・交差	1		1	
	・持久とび			3	
	数字つくり	1			
	引き合い	1			
	しっぽとり	3		3	
	置きとび	1		2	
	片手まわし	1		1	
	なわ体操			2	
	汽車ごっこ			1	
	なわくぐり	1			1
	高とびこし			1	1
	波とび			1	
C-2	ボール遊び	2	3	7	
	的けり	1			
	的入れ	1			
	中あてボール	4	2	2	2
	ドッチボール			5	3
	サッカー	1		2	2
	ボール送り		1	1	
	ボール運び			1	
	キャッチボール			2	
C-3	ころがす	1			
	わたり歩き	1			
	とびこし	1			
C-4	ケンパーとび			1	
	色とび			1	
C-5	投っこ				1
	しっぽとり				1

表Ⅵ　遊具を用いない活動内容

内容＼指導者		四歳児クラス 講師	四歳児クラス 担任	五歳児クラス 講師	五歳児クラス 担任
マラソン		4		6	4
かけっこ		2	1	1	
リレー		1	3	1	4
片足とび					1
後走り					1
引っぱり出し		1			
手押車		1		1	
足踏み		1		1	
はさみとび				1	
馬とびこし				1	
手打ちとび				1	
鬼あそび	ひょうたん鬼		1		
	子ふやし鬼		2		1
	引越し鬼		2		
	かわり鬼		1		1
	助け鬼		1		1
	色鬼		1		
	氷鬼			2	
	二人鬼	1			
	オオカミさん～			1	
	開戦ドン				3
	ダルマさんが～		1		
	ねことねずみ	1			
フォークダンス			4		7
表　現			1		1
リズム体操			2		1
総クラス数		15	14	15	13

講師を採用している園では，1・講師にまかせてある(80.1%)，2・講師が計画をたて園に提出する．3・学期初めに担任等と話し合い講師が計画をたてる．となっているが，他の園では，1・子どもの状態をみて適当に決める．2・園として学期（年間）でとりあげる活動が決まっているとなっている．一斉活動における使用遊具状況を表Ⅱに，また，具体的な内容を表Ⅲ～表Ⅵに示した．講師による指導内容は，4Cでは前まわり下り（A—1），前転（B—1），とび乗りとび下り・よじ登り下り（B—3），各種のなわとび（C—1），中あて（C—2），マラソン（D）などが，5Cでは逆上がり（A—1），腕立て開脚とび越し（B—3），前転（B—1），各種のなわとび（C—1），ドッチボール（C—2），マラソン（D）などが主な内容としてあげられている．担任による内容は，4Cでは，ボール遊び，中あて（C—2），フォークダンス・リレー・鬼遊び（D）が，5Cでは腕立て開脚とび越し（B—3），各種の短なわとび（C—1），中あて・ドッチボール・サッカー（C—2），フォークダンス・鬼遊び・マラソン・リレー（D）などがあげられる．

以上が一斉活動としてとりあげられた運動的活動の主な内容である．一斉活動は保育者（指導者）が必要に応じて，意向的に内容を選択し，環境を設定するが，その必要性は，自由遊びをより発展させるため，クラス全体に共通して身体的能力などに問題がある，自由遊びにはできない活動をさせたい，子どもだけでは安全面に問題がある，などの時であろう．その中での活動は，子ども一人ひとりが自分の技能レベルに応じて，それぞれのやり方で展開していくものであり，ここでの指導は自由遊びの時と同様に「できないこと」を「できるように」という指導を意味するものではないであろう．特に大型遊具の使用は一斉活動の場が多いが，遊具に対する大人のイメージ（器械運動）からの内容の決め方には問題があるであろう．今回は講師の指導内容にその傾向が強くみられた．

Ⅴ　まとめと今後の課題

今回は期間も短かく，また間接的な調査であったため，幼稚園における運動的活動の実態も部分的にしかとらえられなかったが，運動を一斉活動としてとりあげる園はこれからも多くなっていくであろう．それは子どもの健康，体力づくりへの積極的な取り組みとして好ましいと思われる反面，その内容・指導法については充分検討されなければならない．また私立幼稚園においては体育専門講師に依存している傾向が強くみられるが，専門講師の採用理由について，保育者の能力不足があげられるのであれば，養成機関としても今後考えていかなければならないことであろう．保育者が計画的に活動を展開していくためには，保育者自身，幼児の発達に伴う運動をどう理解しているかが重要なポイントとなる．「指導」という言葉の響きが保育者にとって「何か教えなければならない」と解釈されるのであれば幼児に対しての望ましい指導はありえないであろう．最近，保母試験や幼稚園の採用試験の中に運動能力テストや他の運動のテストを組み入れているところが多くなってきている．また「運動の好きな人」「幼児体育に興味のある人」など条件をつけている園もある．このようなことは保育者として体力の必要性ばかりでなく，運動経験の豊かさ，運動への好意的な意識が幼児の運動理解へつながるとの考えからであろうと思われる．幼児教育を専門的に学び，一人一人の子どもを充分に理解しうる保育者が運動的活動場面においても一番適切な指導者であるはずであるし，また，あってほしいと願っている．

本研究を進めていくにあたって諸助言をいただきました山内昭道先生に心から感謝いたします．

引用文献

1）近藤充夫　幼児・発達課題と運動，体育科教育 p 16～18　大修館書店　1983．3
2）本研究の一部は日本保育学会第37回大会で発表した．

参考文献

1）勝部篤美　幼児体育の理論と実際　杏林書院
2）遠山善一郎，山下博　幼児の体育の指導　不昧堂出版　1973
3）坂元彦太郎，山下俊郎監　心身を強くする遊び　小学館　1969
4）重田定正，船川幡夫，北条礼子，近藤充夫，安藤孝　幼児健康教育法　東京書籍　1978
5）幼少年教育研究所編　健康　協同出版　1970
6）近藤充夫監　幼児の運動　フレーベル館　1983
7）近藤充夫編　健康　同文書院　1980

8）日本体育学会編　体育の科学　体育の科学社 1975.8
9）日本体育学会編 体育の科学 体育の科学社 1981.4
10）日本体育学会編　体育の科学　体育の科学社 1985.1
11）新体育社編　新体育　1973.6
12）文部省　幼稚園教育指導書健康　フレーベル館
13）長谷美憲治，陶口準　幼児の運動の好みと運動能力　日本保育学会第34回大会研究論文集　1981
14）武山隆子，近藤充夫，松島宏，田村道子　幼児教育科専攻学生の体育に対する意識および態度についての実態調査　その1　日本保育学会第33回大会論文集　1980
15）武山隆子，近藤充夫，松島宏，田村道子　幼児教育科専攻学生の体育に対する意識および態度についての実態調査　その2　日本保育学会第34回大会研究論文集　1981
16）元橋幸子，森園澄子，菅原佳代子　幼児の運動遊びに関する一考察　日本保育学会第38回大会研究論文集　1985
17）寺本令子　健康保育の実態について　日本保育学会第36回大会研究論文集　1983
18）森園澄子　幼児体育の一考察　日本保育学会第38回大会研究論文集　1985
19）若松美恵子　幼稚園における体育指導の現状と問題点　日本保育学会第30回大会研究論文集　1979